



一英文学者の観た英国国民性：  
W.DibeliusのNational  
Characteristicsを中心としての研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 潮田, 隆文 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00000880">https://doi.org/10.32150/00000880</a>

## 一 英文学者の観た英国国民性

— W. Dibelius の National Characteristics

を中心としての研究 —

潮 田 隆 文

北海道学芸大学岩見沢分校英語英文学教室

Takabumi USHIODA :

A Study on English Characteristics.

## 緒 論

ある国民の特性を一時代を画して平面的に捉えることは、いわば各社会、各階層、更には各年令層の複雑さから、その最大公約数を求めそれから montage を作るようなもので、決して容易ではない。又更に各時代を通じて、即ち立体的に各事相にわたって掘り上げ、或いは掘り下げて各関係項目を比較考証しながら結論を得ようとすることは一層至難なことであつて、考古学者の発掘作業にも比すべきものである。

諸々の科学に於いて、この montage なり、発掘作業の結論なりが同部門の他の、又は次の世代の研究者を利益することは云う迄もないが、文学の部門でもこれは決して例外ではない。殊に文学中でも内容が複雑で従つて難解とされている英文学に於いては、先人又は先輩のそうした研究は、後の研究の正鵠と広さと速さとに如何に大きな便利と利益とを与えることであろう。

イギリス国民性に関する著書は、政治家の書いたもの、歴史家の著したもの、宗教家のものしたもの、又文学者の書いたもの、その他イギリス人自身の手になるものもあれば外国人の手になるものもあり夫々の扱い方も複雑多岐である。併し一衣帯水を隔てゝ可成長期に亘つて歐洲大陸から一種の孤立を続けているだけにイギリス国民性の montage は複雑多岐の中にも見ようによつては相当に鮮明なものがあるようにも思われる。「英国民はこの上もなく正直を尊ぶ。正直を尊ぶ心は事実を重んずる精神と併行する。事実を重んずる精神は実行性を促す。実行性は物事に抜目のない常識に富んだ人間を作る。常識に富む者は心の敏感よりも心の平均に重きを置く。かくて真面目で率直で飾りのない人、所謂 plain man が出来る。

そして彼は商工業に於いて大成功を収め、政治に於いて Tennyson の所謂 crowned republic の民として穩健な民主主義を実現し、教育に於いて自重心を与え、思想界に於いて難解な術語の羅列を事とする専門家風を避けつゝ、ひたすら明白な説明を心掛ける。これが一般普通の英国人である。この plain man は様々な優越性を有っているけれどもどこか散文的だ。John Bull 君はともすれば詩的想像に欠けている実務家に過ぎないかの如く誤解され勝ちである。そして彼は独立自由を尊び“Each oars-man was himself the arch pirate” (Sidonius Apollinaris)と云われた程個性が強い。かくの如く秩序を守り法則を尊ぶと共に、その秩序と法則とを徐々に断えず改めながら独立自由の精神を発揮してやまぬ英国人は、常識に富み、実行力に長じているのみならず、驚

歎すべき独創力と想像力とを特徴としている。これは英国民を観察するのに見逃すまじき点で彼等の文学を研究するものゝ深く意を留むべき所である。」とは齋藤勇博士の批評であるが、同博士の広い読書と従つて該博な知識と体験とからの結論で、少なくとも各種研究書の所謂 montage たる節々を感知させられることは驚くべきものがある。兎に角イギリス国民性の要点を簡潔に力強くまとめた至評であり後輩研究者の寄辺とすべき言葉のように思う。

さて余の研究の対象たる National characteristics についてであるが、Wilhelm Dibelius (1879~1931) の大著 England 中の Book 1. Chapter VI に述べられているもので、前記齋藤博士も相当に参考としているらしく認められる。Dibelius は1925年以来 Berlin 大学の英語英文学の教授を勤めたドイツの学者で、もともと England 執筆の動機が第一次欧州大戦後のドイツ国民の士気を鼓舞することであつたことから、その論法に偏見も見られ可成の批評もあるが、そのイギリス国民性に関する部分に於いては、複雑なイギリス国民性を歴史的事実を根拠として解明を試み、特に語学者らしい物の観方も随所に現われて、英国人自らの筆になつたものとは異り一外国人のイギリス国民観として、特に、等しく英語英文学の研究を事とする者達には一層の興味をそゝられるものがある。

## 本 論

Dibelius のイギリス国民性論は八の項目に分けて進められているが、中には重複していると思われる個所も可成りあると思われるので、その主要点と考えられる数節について而も文学者らしさのうかがわれる個所を重視して行きたいと思う。

われわれは先ず彼の論の中心思想を呑み込んでおく必要がある。所謂彼の下ザクセン・フリーランド説で、これは特に殆んど全文を齋藤博士の訳文を参照しながら紹介しておきたい (Mary Agnes Hamilton の英訳——以下引用は全部同書による。)

The essential traits in English character are those of the peasant of Lower Saxony and Friesland who has kept his old mentality with very little change in his new abode. Fundamentally, he is like the peasant of all climates, a creature of rather materialistic bent, fond of money and the pleasures of the table, matter-of-fact, conservative, energetic, and tough. (イギリス国民の特色は、下ザクセン及びフリーランドの農夫の特性である。だがその農夫は、その新住居でも昔ながらの心情をほとんどその儘に維持している。もともと彼は各国の農夫と同様に、むしろ唯物的な傾向で金銭と食卓の快樂とを好み、事実を重んじ保守的であり、精力旺盛であり、そして不撓不屈である。) Admixture of Scamdinavian Viking strains, partly from Scandinavia direct, partly through France, has raised the naturally strong will of the primitire stock to a Berserker force such as is found in no other people. (半ばは直接にスカンジナヴィアから、半ばはフランスを通じてスカンジナヴィア海賊の血が入り混つているので原始土族の生れつき強い意志は他の国民には見られぬような慍悍な力を得るようになった。)

The qualities of fineness, tenderness, and intuition hidden everywhere under the hard shell of the Lower Saxon peasant, are in constant danger of being strangled by this harsh egoism and strife. (下サクセン農夫の堅い甲羅の中に隠れている繊細、柔和、直覚の諸美質は、この頑固な主我性と斗争性のために常に閉塞される危険にさら

されている。)

In the same way, the profound sense of religion native to the type, is in perpetual conflict, here as in the homeland, with the defiant arrogance of the peasant who cannot admit a fault sees himself invariably as a model of piety, and looks down upon all who differ from him with a sublime self-assurance. (この種の国民にはつきものゝ、深刻な宗教的感覚は、故郷即ち下ザクセンに於けると同様イギリスに於ても、自己の欠陥を認め得ずに、常に自ら敬虔の模範を以つて任じ且つ意見を異にする者を見下して昂然自ら正しいとする、かの農夫の傍若無人の傲慢不遜な態度と絶えず戦つている。)

概ねドイツの学者の学風には帰納よりは寧ろ演繹の方法をたどる傾向があつて、相錯綜する個々の事物の中にも何か共通の諸点を探し出して、これを拡大し、次いでこれを総括して見なければ承知しないのである。デベリウスの場合も決して例外ではなく冒頭に先ず下ザクセンの農夫という彼等ドイツ人にとっては、眼前の具体的人物の諸特性を敢て羅列してこれから現代イギリス国民の特性を描き出そうとしているのは、恐らく、英語発達史を繙いているであろう、英語英文学教授としての彼には当然の行き方であり、或いは自然の手法であつたかも知れないが茲に相当の無理があり勢い濃厚な独断の傾向が生ずるのであつて、時には俄かに読者の賛同を得難い原因があるように思う。即ちデベリウスは唯物的に従つて事実を重んじ且つ保守的で、精神的だという農夫一般に共通らしい特性に下ザクセンが持つ歴史的固有性から類推される、不撓不屈と慍悍決死の二特性を描出して結局主我的で斗争的な下ザクセン・フリースランド型の農夫を作り上げているようである。即ちデベリウスは英国国民性を描出する手法として前記下ザクセン農夫、実は一般的農夫の諸特性に合せて、先ずイギリス国民の個性の強いことを述べているが、その裏付として彼の掲げている数々の例証は、彼の該博な知識と旺盛な研究心を示すものとして感歎と興味とを深くさせられるものがあるが、随所に見られる「下ザクセン農夫の如く」という語句には、彼の偏見的な前提として、何となく残念にも思われるが、一方に如何にもドイツ流の学者らしきも感ぜられて面白い。

さて国民性の分析的解明は容易なものではないと思う。何故ならば一つの特性が他の特性から全然独立して存在することは絶対にないからである。例えばイギリス人の個人主義を又は個人本位を論ずる場合それが独立自尊心の強さを示す意味に於いては、やがて自由性にも実行性にも通じるものであり従つて画一や強制への反撥ともなるからである。

デベリウスはイギリス国民性論をすゝめるに当り、第一章の Type and Individualism 以下第八章の Love of Freedom に至る迄八項目にわたつて細かな解明を試みているが、前述の如き理由で、茲には大体 Individualism, Utilitarianism, Conservatism, Gentleman の四項目を中心としてデベリウスのイギリスの国民性論を眺めて見度いと思う。尚、彼の推論は彼の該博な学識を反映して応接に暇のない程複雑多方面を極めているが、その中から主として語学、文学又はそれに関連した記述を取り上げて行きたいと思う。

#### Individualism について

デベリウスは開口一番 The Englishman is an individualist. といつて個人主義又は個人本位をイギリス人の特性の最初に挙げているが、これは彼自らも述べているように全く伝統的な観方であるが、その内容的解釈に至つては個性が強すぎるとか独立自主的であるというよりは頑固強情の意味が相当に強いらしく He will submit to no order, save of his own creation and is at all

times prone to revolt against compulsion whether governmental, military, or sacerdotal. (イギリス人は自身の命令の外は何人の命令にも敢えて従わず強圧には——それは政府であろうと軍のであろうと、将又司祭職のであろうと、——常に反抗する傾向がある。)と断言しているあたりは、例の下ザクセン農夫の前提から来る無理な断定ではなからうか。ともあれ彼の見方によればイギリス人の個人尊重乃至は重視の意味は相当に強く、社会的感情(例えば尊敬)が表面化する場合にも市町村などの community に対する尊敬という形よりも、寧ろ他の個人、たとえばそのまた夫人とか又は成人と同等の生存権を持つ幼児の個性尊重の形をとると考えている。一国の歴史ですらイギリス人には経済的社会的又は歴史的な色々な流れの発展ではなくて、個人発展の流れだと観る位、デベリウスはイギリス人の個人主義(個人本位)を極論している。彼の推論には下ザクセンの農夫の幻影のみがこびりついて気候風土等の要素の影響力を無視しているようにさえ考えられる。

併し Darwin や Spenser のような進化論者や進化論的哲学者がいるにも拘らず、個人主義の強いイギリス人は、理論よりも身近かな事実を重んずる余り、科学に対しては寧ろ懐疑的だと観ているのは、正しくイギリス国民性観の重要な一項目である。更にイギリス人の個人主義が理論よりも事実を重要視する証左として、個人の伝記に関心を持ち、その結果は伝記文学の愛好となつて現われ、その流行の盛なこと他国に比を見ないことは、デベリウスばかりでなく諸家の見解の一致しているところである。伝記文学流行の原因を敷衍するものと見られる interview についてデベリウスの記述は実に興味深い。

The interview, like the ubiquitous kodak, which tracks the great man down to the intimacies of his home, is, despite the contrast in which it stands to the English ideal of the sacrosanctity of the home, an Anglo-Saxon invention, which of course has developed further and faster in the great Anglo-Saxon democracy across the seas than in England, inveterately aristocratic still.

(コダック写真機が到る処で目に留まるのと同じように偉人又は名士に、親しくその家庭にまでも追すがつて行く——今流行の——個人訪問は家庭の神聖不可侵を理想とするイギリス人の立場とは全く対照的ながら、これはアングロサクソンの発明であつて、今も尚、貴族的なイギリス人よりも、海を越えた彼方のアングロサクソンの大民主義国アメリカに於いて更に高度に而も一段と急速に発達している。)

個人的で従つて事実を重んずる現実的なイギリス国民性は、文学では散文的よりも詩文的であつて、その散文も個人の生活又は性格、描写を主とした小説が多く空想に基くものは比較的に少ないと一般に批評されているが、デベリウスも、この点については「純粹に道徳的な又は政治的な或いは社会的な問題を追う小説や劇は比較的稀だ」と述べている。デベリウスは特に Charles Dickens についての研究書も出しているが、デケンズの Oliver Twist 及び Bleak House が救貧院や刑務所などによつて表わされる社会問題の芸術的分析を立派に見せながら結局は個人の性格又は個人的冒険の物語に終つて了つたと述べ、デベリウスは彼のイギリス文学論に於いて、英人は抽象的題材よりも個人の性格描写が得意であることを実例を以つて附言している。デベリウスは次いでイギリスの学校教育を論ずるに当り流石に individualism を以つて律し得ずにイギリス人は伝統の枠内でだけ individualist だがその枠外では herd man (herdman ではなく)だと断定した後、次のように type なる語を以つて説明を試みている。

His schools are devoted to the creation of a dominant type, not of individuals

whose independent thought and action might be dangerous to that type.

(イギリスの学校は専ら個人を作り上げるためではなくて英人型をつくり上げるために当てられている。因みにこの種の英人型にとつては、個々銘々の思想や行動は却つて危険なものとなるであろうが。)

これはデベリウスのイギリス学校観であるが、彼の例の下ザクセン農夫説の個性観の行詰りではあるまいか。蓋し個人主義は独立自尊的な意味の強い場合には現実の深刻な凝視となり、やがてそれは強制や不満に対する反撥から自由への希求となり、その自由が自我の完全に伸展した姿、即ち理想的個性を追求するものだと考えることは当然ではなかろうか。哲学的には German thoroughness に対し English practicality と対照されているが真に適切な表現であると思うが、ドイツやアメリカの学校が従つて Lecture System (講義本位制)であるのに対して、イギリスの学校は一般に学問的もしくは理論的理想を求めるのではなくて、いわば独立自主に堪える円満な常識を持つた Individual 即ち理想的な個性(イギリスではこれを gentleman というのであるが)を陶冶錬成するのが目的であつてデベリウスのいう type の形成には相違ないにしても individualism と対立する意味合いのものではなく、寧ろ individualism の伸展された姿と考えられるべきである。従つてイギリス文壇に於いて個人思想、従つて前述の論法からすれば自由思想が最全盛を極めたあの Romantic Age の文人達——Blake, Shelly, Byron 等、又彼等におくれて Swinburne, Widge shaw 等が、ドイツの Goethe, Heine, Nietzsche ノルウエイの Ibsen 等が同時代の絶讃を浴びたのと事変わり、殆んどイギリスの同時代に受け入れられなかつたのは、デベリウスによれば所謂 type から外れていたからだだと断定しているが、これはtypeに関連して論ずべき問題ではなくて、彼等の余りにも自由奔放な個性が容易に理解を得られなかつたのだと解すべきである。即ち彼が

The variation from the type was just the thing that made success slow and difficult at home. (彼等——前記の詩人たち——がイギリス人型と違つていることが正に彼等の国内での成功を遅く、且つ難しくしたのだ。)

と述べているのは当然のように思う。

併しイギリス人が総じて強い個性の持主でありデベリウスをして只に herd man と呼ばしめた計りでなく、更に彼を

The world for him is a wide plane, occupied by many other Lower Saxon peasants all at appropriate distances from each other. (この世界はイギリス人には——お互い  
の間に適当な間隔を置いた下ザクセン農夫たちに占められている——広い平面である。)

と一種の集団的威圧を以て口惜しがらせている程、一様に強い個性の持主たちである。兎に角内容的に色々な意味を持つ Individualism は、イギリス人を深く浮彫りにする特性で彼等をして理論よりも事実を、そして深遠な学理よりも常識を求めさせ、自己を強く守る余り、あらゆる抑圧に反抗して自然に自我の解放即ち自由への指向となつたことは、たとえデベリウスの力説通りに下ザクセン農夫の祖先と多少の関係があるにしても、全てを茲に結びつけるのは常識的ではなく、それにも拘らず、この Individualism は Humanism と結びつく時に自由思想の大きな流れとなつて、イギリス人の強い憲法的思想と共に、イギリス思潮の主流をなしていることに、我々は特に注目すべきである。

Utilitarianism について

この項目の冒頭にデベリウスは、

Like the Lower Saxon peasant, again, the Englishman has a penchant for the obvi-

ous, the prosaic, the practical and the useful. (またも下ザクセンの農夫に似て、イギリス人は明瞭なこと、散文的なこと、実際的なことと実用的なことゝが好きである。)と云う。此処で我々は冒頭に引用した彼の中心思想の一部を繰り返さねばならぬ。

「——スカンヂナヴィア海賊の血が混つているので原始土族の生まれつき強い意志は——慥然決死的な力を得るようになった。下ザクセンの農夫の堅い甲羅のうちに隠れていた繊細、柔和、直覚の美質は、このかたくなゝ主我性及び斗争性のために常に、閉塞される危険に頻している」即ちデベリウスは不撓不屈で直情径行的な、云い換えれば本能と直感とで全て實際的に事を決めて、およそ観念や理論的な事柄には背を向けたがる農夫の姿を歴然と思ひ浮べつゝ、絶えずその幻影を追いながら Utilitarianism の論を進めようと考えているらしいが、その当否についての批評は措くとして、これを彼一流の推論的な綾としてだけは受取つて置きたい。ともあれイギリス人の尊ぶのは空漠たる理論ではなく、実行であり行為である。

Of theory, the Englishman has always had an innate mistrust, and compulsory education was not introduced until 1876, and University teaching, brilliant exceptions notwithstanding, has always been much less intellectual than on the Continent.

(空論についてはイギリス人は生来常に疑惑を持ち続けている。義務教育も1876年迄は入れられなかつた。大学教育も素晴らしい例外もあるが、歐洲大陸の大学教育に比べて理智的ではない。)

とデベリウスも断言している位である。即ち学校教育も実用的な技能が中心であつたのである。語学者らしく彼は何より先に英語をとりあげて「英語の文法ほど味もそつけないものはない。実用上余分なものは全て取り除かれている。話し言葉の美しさを左右する微妙な話し方のあや等は消えて了つている。たとえば呼びかけの代名詞は you 只一つだけで you と云つても親近者に呼びかけているのか、通り一ぺんの呼びかけなのか常に問題である。屈折は殆んど失せ、文法的諸関係は単純化され音節は相手の理解に必要な最小限度に切り詰められている」と正当な批評を試みた後「要するに英語は總体的には殆んど飾りがなく、そのくせ万事が著しく明瞭精細に表現されて、理解のためには些かもつまらぬ努力の必要がない」と寧ろ讃辭を以て結び、彼の専門分野から今後の彼の推論に簡明な基礎を据えている。

スペインの学者 Madariage がイギリス人は fair play を特色とする実行の人であり、フランス人は法律思想に秀でている観念の人であり、スペイン人は体面を重んずる心を誇りとする情熱の人であると説いているが、真に至言のように思われる。兎に角少なくともイギリス人は理論好きなドイツ人とは寧ろ反対で、明瞭に厳密に論理的結論を出さねばならぬ心理過程は大嫌いである。従つて例えば規則に於いても総括的な名文句は避けて、個々の要点が重視される。即ち偶々迄徹底的で且つ包括的な法律的条文も、イギリス人には何等ピンと来ないのである。そこで歐洲大陸人には納得のいかない事だが、近代立憲政治の根底たる民法刑法が中世紀に起源を持ちながら、今尚実例又は先例によつて、近代的必要事に適用されていて、時には緩和又は免除されたり時には代用されたりしている、と述べて博識なデベリウスは、例を生活に最も卑近な法律——所謂イギリスの不文律——にとりながら一段と口調を強めて、

The turn for the practical and obvious is inflected in British learning, partly to its advantage and partly to its disadvantage. English philosophy is not, like German or French, mainly metaphysics; but is great in psychology which gives a handle for the treatment of men, great in ethics which regulates the behaviour of men,

great in giving a philosophical foundation to sciences so eminently practical as politics and political economy.

(実際的なことや、はつきりした事の好きなイギリス人の此の癖は、彼等の学問にも反映している。——そしてその事は半ば有利な事もあり、又半ば不利な事もある。ドイツやフランスの哲学とは異なりイギリスの哲学は主として形而上学ではないが、時に人間を治療する好機会を与える心理学として重要であり、又時には人間の坐作進退を規制する道徳として重要であり、更に又、政治や経済のように特に実際的な哲学的根底を、諸科学に与えるものとして重要である。)

と断定した後、イギリスでは寧ろ純粹哲学者として挙げられる Francis Bacon は所詮は、イギリス人らしい経験学派の哲学者であり、又 John Locke は同じく認識論的経験論者であつて、共にイギリス特有の practicality 後に云う utility の思想に連なるものとして論をすゝめている。従つてデベリウスの考えでは、進化論から空論めいた目的論を追放して、全ての進化は生存競争と適者生存の二大現実の結果であると断言した Darwin こそは、イギリスの代表的科学者である。次に彼は哲学の最も著しい実践的な現われである道徳に話をすゝめて、イギリスの哲学者達の utility (功利) を土台とした道徳律設定の工夫こそは、一般文化にとつて極めて重大な事柄だと云つている。即ち彼によれば道徳、節制、修養などによつて整えられた快樂こそは人生最高の善であると説いた、エピクロス学派の姿こそは最もイギリス人の人気を集めた科学的福音であると、イギリス哲学に最大の讃辭をすら与えた後、Jeremy Bentham や John Stuart Mill の名を挙げて彼等の提唱した Utilitarianism (功利主義) は個人の利益ばかりでなく、最大多数の利益をも目的としているものと理解すべき事を特に指摘している。これは前述の Individualism と後にふれねばならぬ democracy に関連するものとして特に注目を要する。

When a Member of Parliament exclusively pursues his own selfish desire to become a minister, and the individual voter exclusively pursues his own selfish desire to pay as little taxes as possible, the diagonal between these two selfishnesses will give the desirable end, i.e, careful and economical administration.

(国会議員が大臣たらんと私慾に汲々とし又個々の投票者が出来るだけ少額の税金で済まそうとの私慾に汲々たる時、これら二私慾間の対角線こそは望ましき結果即ち周到且つ経済的な政治をもたらすことになるであろう。)

デベリウスからのこの引用は Utilitarianism の真相を評し得て至妙なものがあり、同時に Utilitarianism とは結局、先の項目 Individualism の一内包にすぎないことを知るのである。実に功利主義は哲学を通俗化せしめ、そしてやがて一時代を風靡した特色としての Pragmatism の別名でアメリカにも渡つたが、この傾向が Carlyle, Dickens, Mathew Arnold によつて猛烈な攻撃を受けた事も一英文学者としてのデベリウスは決して忘れていない。

### Conservative について

Further, the Englishman transplanted to his new home the Conservative instincts of the peasant of Lower Saxony and Friesland.

(更にイギリス人は下ザクセン・フリースランドの農夫の保守的な本能をその新居に移植している。)

デベリウスは例によつて、上記のような前口上で保守性を論じ始めているが、本能か否かは別



問題として、イギリス人の保守性は万人の認める所である。そこで我々は、デベリウスと共に暫くの間その由来する所とその実態とを研めて見度い。

先に我々は第一の特性 Individualism は結局は自由に通ずる道であることを見出したのであるが、イギリス人の Conservatism は結論的には法則の遵守であることを認めねばならぬ。

何故ならば、元来イギリス人は法則を守り秩序を尊ぶ国民として有名であるが、規則通りになるという事は、裏を返せば制度や習俗に従うことであつて、このような実行上の心構えや姿を我々は保守的だというからである。従つて保守とは法則の遵守を意味するという論理は当然成り立つのである。思潮を中心としてイギリスの文学を論ずる場合に、自由と法則とを二本の柱とする学者のあることは当然であろう。かゝる意味でイギリス国民性としての Conservatism は特に重要である。

They (Conservative instincts) continued, in him, with enhanced strength, since no rapidly changing course of history challenged his Conservatism with new events of the first order.

(歴史上の急激な変化が、第一級の珍事件を以て、保守主義に挑んだ事がないのでそれ等(保守的本能)はイギリス国民の中に力強く持続して来た。)

と言つてデベリウスは欧洲大陸と違つて、イギリスでは驚天動地の大戦争が自国本土内で起つた事のないことを、保守性を強化している唯一つの原因として挙げているが、唯一つという事は問題としても兎に角正論である。事実イギリスは、過去に対して判然と一線を画するような史的事件一主に戦争一を本土内で迎えた事は殆んど一度もない。成程 the Wars of the Roses や the Puritan Revolution 等はあつたが、その規模や影響範囲に於いて、大陸の the Thirty Years' War や the Napoleonic Era に比すべくもない。イギリス本土での戦は—これとて王位争いの小競合であつたのだが—1746年の Culloden の戦であつた。兎も角欧洲の全国家間で自国本土内での戦争の何たるかを弁えないのは、独りイギリスのみである。従つて文化が着実順当な発達をした国家は独りイギリスだけだと言つても過言ではない。ドイツでもフランスでも中世・近世両紀間には深い溝が横わり、即ち教会の支配が、人間的なもの一切を神と信仰との前に従属せしめた中世紀と、人間性自身の完全性と価値とを強調する近世初頭の文芸復興期との間には一大断層があるのであるが、イギリスのみは英詩の始祖 Chaucer と大文豪 Shakespeare とは脉々として連なつている。ドイツではロマン派の興隆は前の紀の作家達を、悉皆反古竈に入れて了つたのに、イギリスではロマン派の文人は、Byron のように、自ら Pope の流れを以て任じ且つ熱情的に賞讃さえている。デベリウスはこうした動きを建築的に巧に表現している。

Nowhere is the mixture of types in architecture so general as in England, where Gothic and Renaissance, and even Gothic and Baroque are found together; nowhere have the forms of the past so tenacious a hold upon the present.

(イギリス程、建築上の諸様式が一般的に相交錯している国は何処にもない。即ちそこではゴシック風とルネサンス風とが又ゴシック風とバロック風さえも同居しているのが見られる。言うなれば過去の諸様式ががっちりとして現在を抑えつけている所は他に何処にもない。)

デベリウスはイギリス国民の保守的特性の原因を上述のように、特別な歴史的事情に専ら帰着せしめているが、我々は第二因として Uniformity (画一) を、第三因として Naturc (自然) を加え度い。尤も第二因については、デベリウスは次項に独立の特性として掲げてはいるが寧ろ第

二因とする方が適當だと思う。一つの小村に、数軒の旧家がある場合よりも、比較的に大きな村に何百という旧家が軒を列ねている時の方が、遙かに保守性が強大だからである。

To the great surprise of the Continental student of England, this matter-of-fact, practical, conservative English character appears wherever the Anglo-Saxon is met with. The differentiation between geographical sub-types of the race is astonishingly small.

(大陸の、英国研究家が非常に驚くことだが、何処でアングロ・サクソン人と出会つても、この平凡な、実行的でそして保守的な性格に必度お目にかゝる。即ちこのイギリス民族の地理的条件による副次的類型の差は極く少ない。)

勿論デベリウスからは自国ドイツとの比較が頭を離れることはない。彼によればドイツはイギリスとは対照的に地方的差違の著しい国であつて、例えば旧 Prussia と Bavaria, 更には又ハンザ同盟諸都市間の大きな差違にかてて加えて、各職業間、例えば僧職、大学教師、士官、商人、高校教員、小学校教員、農民、美術家の間にも格段の差のあることを指摘し、ドイツでは彼等は言わばそれぞれに特別な人種でそれぞれに言語、態度、骨相、時には道徳をさき異にし、勿論外見的にも違つたとさえ附言している。彼の説ではその由つて来る所はドイツの小公国間の又は小公国内の政治的及び産業的分離政策によるとしている。イギリス国民性と直接の関係はないにしても次の引用は興味あるものである。

It—the absolutism of many petty German princes—created a great deal of caste snobbery, but it also served to train certain hereditary qualities of immense value for modern life—the sense of honour in the officer, idealism in the clergyman, duty in the official, love of knowledge in the teacher.

(それは—ドイツの多くの小公国の専制政治は—それぞれの階級毎の独りよがり的な紳士気取の気分を創り出した。が同時に近代生活にとつては、この上ない価値のある世襲的な諸美質を錬成するのに役立つもした。例えば士官の名誉感、僧職者の理想的世界観、役人の義務感、教師の知識愛などの如きである。)

一方イギリスでは、ドイツに比べて遙かに古く、ノルマン系の国王達が版図的諸勢力の発達を妨げた結果、人種的な差別すらも大々的に伸びることは出来なかつた。

Emily Bronte の *Wuthering Heights* 中の主人公—粗野で無口でその癖一度激すれば愛憎の炎ともなりかねまじき—*Healthcliff* のようなヨーク州人に比すれば、南部地方の農民は一般に洗練されており、且つ活潑でつき合い易いという風に、地方差が多少ないわけではないが、ドイツ程に甚だしくはない。併しデベリウスによれば

Where real variations from the type appear in Britain, they are to be attributed to the influence of a State developing outside of England and the Norman sphere of influence.

(イギリスで、ほんとうに一般的類型からの差違が現われる場合には、それ等はイングランド以外か又は Norman の勢力圏外で発達した、ある国家の影響力に帰せられねばならぬ。)

と言うわけで Norman の中央集権にも、イギリス国教にも影響を受けなかつた Scotland 人は、却つて Calvin 派の影響を受けて思索的習慣を持ち、半ばイングランド的で半ばはケルト的な天性は Anglo-Saxon 朝廷の上品なものごしに絶対に膝を屈げることのなかつた事は—話が本筋か

ら多少外れながらも一注意すべき事であろう。序でに Ireland 人についても一言するならば、彼等は一般に、幻影を追う夢想家で、忽ち物に感じその癖あき易く芸術的天分を多分に持っているのだが、驚く程物慾が強大で宗教や国民感情のような内面生活でも非常に芯が太い。

これ等はいわば辺地の特性とも見るべきものであるが、英国の中心勢力をなす England では王権下の専制政治が、あらゆる民族を同質の国民性に融合しドイツのような所謂、階級的形式が発達する余地を与えなかつた。成程、地主、雇傭主、産業勞務者の三つの区分は出来だがドイツの小階級のようなものではなく、十七世紀十八世紀の小説や劇、例えば Fielding の Tom Jones 中の Squire Western や同作家の Joseph Andrews 中の Parson Adams のように、前者は粗野で騒々しい呑ん平の大地主で、後者は、学識と敬虔さとはあるが大抵は赤貧洗うが如き牧師であるが England では二通りの階級ではなく、型が認められているだけである。

デベリウスは重要なことを述べている。

While absolutism in Germany attempted to maintain itself by keeping the productive forces of the country neatly compartmented and separate from each other, the method of the British oligarchy was to hold down the masses while drawing the upper section to itself and assimilating it.

(ドイツの専制政治が各産業陣を画然と仕切り、且つお互いから分離して置こうと企てたのに、英国の寡頭政治の施策は社会の上層部を自己に近づけながらそしてそれを同化しながら、大衆を抑えつける事であつた。)

即ち、デベリウスを通して我々は、名を捨てゝ実を取るイギリス人一流の方法が、本来大衆統御の意図でありながら、恐らくは却つて大衆受けをしつゝ、結局は経済的差違の上下階層を上へ上へと結合したのであつて、所謂デベリウスの画一的特性だが、前述の単調な英国史と両々相待つて、これらがイギリス国民の一大特性たる保守主義の源流をなしているのではなからうか。歴史は一種の模倣の流れとも見られるが、画一も亦ある種の模倣による結果であつて、模倣が保守性の要因である以上、我々の主張は正しいものと思う。古い制度や習俗に従つたり守つたりする事換言すれば法則を守ろうとする強い傾向は、イギリス国民からは決して見逃せない重要な特性であつて、この特性を導くものに、イギリスの自然と言つても、主として気候のあることをデベリウスは忘れているのではあるまいか。即ち、イングランドの気候は激変のない穏かなものであり、この柔和な自然の恩恵に生まれつゝ、何時しかイングランド人は、保守主義の一種の弊とも言うべき自己満足におちる事を懸念される程自然の影響を受けているように思われる。

さてデベリウスの言葉を借りると

In England, the eyes of the lower orders are yearningly raised to those above them.

(イギリスでは下級階層の目は耽々として上級階層に向けられている。)

と言う風で、例えば豪商の渴望する所は常に貴族の生活であつて、曾てロンドンの大商人は充分な財産が出来ると、別荘を造り、子女を貴族に嫁がせ、伴が最寄りの市邑の代議士に選出されるのを何よりの楽しみにして、その生活は努めて貴族を模倣して財産、言葉遣い、服装は勿論一般俗衆と非国教教会とえの軽侮、さては既舎の所有から国教々会えの出入に至るまで、万事貴族に則り、やがてこの風が横に広がり縦に流れて一つの習俗として固定するに至り、後世人又は外国人には全く保守的な存在として奇異の目を見張らせるものも多々あることになつたのである。ひいては、多くの中流家庭でも他の子息に比べて長子があらゆる種類の有利な条件を持つているとか、おしなべて長女のみが他の子女に優先して Miss Smith(お嬢様)の尊称を持つたりした。又

In towns, the ordinary house is separated from the street by a ridiculous little strip of ground, useless in itself and only to be explained as a pathetic survival of the ideal to have a park surrounding the mansion as the nobleman had.

(都市では、各家屋は滑稽な位細長い狭い空地によつて、街路から隔てられている。その位の空地は本来無用なので、曾ての貴族のように大邸宅を囲む大庭園を持つて見度いとの理想が、今尚あわれにも残つているのだとしか説明されない。)

といった具合である。

常識を重んずるイギリス人の保守性は、時に皮肉にも非常識とすら思われる位頑固である。イギリスでは学童も、事務員も、金の計算に当つて疾うの昔に廃れたローマ・フランク法の L (libra) s (solidus) d (denarius) で今尚 pound, shilling, penny を表わしたり、又重さや長さを計るのに現在の他国民には到底がまんのならない旧ドイツ法を用いながら、メートル法よりましだと言つて見たり、法律上の文書では西暦紀元の代りに態々王朝紀元を用いてその不便をかこつわけでもなく、今は無用の官職名例えば Warden of the Cinque Ports (五港長官) を残しておいたり、国王の即位に当つては herald (伝令官) を走らせてこの即位に異議ある方々は出で合い候えと触れ廻り、而も大衆も気にもかけぬと言うやり方は、外国人には呆れる計り不可解である。

上の諸事実から判断するとイギリス人は如何にも頑迷なように聞えるが、諸家と等しく、デベリウスも It never ossifies (イギリス人の保守性は決して因襲化するものではない。)と言つている位、他面に常識性と融通性を持つていることがこの国民の一つの特性でもある。只彼が併せて指摘しているようにどんなに、徹底した改革がなされる場合にも、保守精神が必ず残るのである。革新精神の為に体制が全く新時代的用法に転換される場合にも、この国では一般に古い体制が形式的に保存される傾向がある。

Thus there is still a Chancellor of the Duchy of Lancaster although Lancaster has long been assimilated to the rest of the country for the purpose of government.

(かくして行政上ではランカスタは疾うの昔に他の地方に統合されているのに、今尚ランカスタ公領尚書なる役職名がある。)

But the office has become a ministry without portfolio, and so provides for the case where an influential statesman is wanted in the Government but not to act head of one of the great State departments.

(併し、ランカスタ公領尚書の役職は今では無任所大臣となり、閣内で実力者が必要とされる場合に備えているので、省の長官を勤めるわけではない。)

これなどは如何にもイギリス的で、デベリウスは此の他にも数多の実例を挙げているが要点のみを記して次に移ることにし度い。

### Gentleman について

デベリウスによれば

In Germany, again, distinct and separate ideas of life have been worked out for the various classes with appropriate codes.

(ドイツではそれぞれの階層に特有の、画然たる人生観がそれぞれに相応しい拘束を以て工夫されている。)

と言うことで、これだけでは不明瞭ではあるが、例えば士官は他の一般階層には判りかねる名

苦心を何よりも先に考え、時には借金を不用意な行為として恥じるのに、商人は借金は咎めないが、資力以上の生活をするのが一種の汚辱とされている、と言う如きである。所がイギリスではドイツとは違つて画然たる階級別や職業別の仕切見たいなものが無いので、全般に共通の標準が一つしかなく、この標準こそ所謂ジェントルマンの理想である。

然らばこのジェントルマンとは何か。イギリス人の諸々の特性を一身に綜合したような重要な価値を持ち、従つて文学研究者にも格別に関係の深い、このジェントルマンは、一応紳士とは翻譯されているものゝ、スポーツと同様に、原語以外ではニュアンスを失なう語のようである。斎藤勇博士の言葉を借りると辞典の解くジェントルマンとは「歴史的にいえばジェントルマンは名門の出というほどの意味である。即ち貴族 (nobility) には列しないけれども宮廷の許しを得て用いている紋章を有する人である。この意味に於けるジェントルマン即ち gentry, 言いかえれば名門の人 (a man of gentle birth) は概ね国王なり公侯なりの侍臣であつた。そういう人々は名門の出にふさわしい美質をそなえ、そして善い事を行うのが常であつたから、ジェントルマンは武士の華とでもいふべき中世の理想の人物となつた」と言うように gentleman の内容には多分に歴史的な深さがある。デベリウスはこの項目の冒頭に次のように述べている。

In so far as modern civilization cherishes the belief in an ideal human being, this ideal is derived from a blend of mediaeval chivalry and Renaissance humanism.

(近代文明が理想の人物という信念を抱く限り、この一ジェントルマンの一理想は、中世の騎士道と文芸復興期の人道主義との混合体から由来している。)

初め人道主義の主張は見方によつては人間の全才能の平等円満なる発達を理想としたものであり、且つ又哲理の、全生活への滲透を、理想とするものでもあつた。これはルネサンスの遺産と言つてもよい程の力を持つているこの期の各種運動に、共通の精神であるが、ルネサンスは同時に中世紀の騎士道の理想—自己を犠牲にしても君主はもとより個人の名誉のためにも、絶対的忠誠を誓ふことや、婦人への尊敬、それに服装と作法の優雅—などの幾つかを、意識的に引継いでいた。従つて我々は gentleman の内容を考えるに当つては knight との参照を忘れてはならぬ、先ず第一にデベリウスは

Distinctly and more strongly than with any other people, the traces of this old knightly ideal live on in England.

(この昔からの騎士の理想の跡が、他の如何なる国家に関してよりもイギリスに於いては判然と而もより強く続いている。)

と言つてゐるが、その特色は時代の動きと共に大分その輝きを変色して来ている。即ち諸侯の時代が過ぎ去つて非軍事的な諸要素が、貴族社会に滲透しかけた時、古い騎士道の理想はブルジョアにも理解し易いように漸時変貌され、等しく身体を鍛えるにも gentleman は sports を以て騎士の武技に代えたのである。

騎士の君主に対する忠誠は姿を代えて尚も残存している。

Moreover, the absolute fidelity with which the Briton sticks to a leader, once he has chosen him, is nothing but the monarchical instinct in a modern guise.

(その上イギリス人が一旦ある人を首領として選んだ以上は、その人からいつかな離れぬ絶対的忠誠は、現代的紛装をした対君主的な本能に外ならぬ。)

かくて現代政界の各首領は選挙の当落に心置きなく各党の綱領のまゝに活動が出来るし、一方に於いて労働組合員は委員長や書記長の仕事や政策が気に食わぬ時でも彼等の再選出を続けるこ

とを憚らぬのである。イギリス国民のかゝる騎士道の気概こそは、薄つぺらな為には悪評の高い近代民主義への強力な平衡力でもあると、デベリウスは附言しているが重視すべき事である。

次に曾て騎士の持つた名誉心は今の gentleman 一般に残っている。往時、騎士個人の名誉の保持は dual (決斗) に結局は持つて行かれたのであるが、勿論今は決斗は見るべくもないのだが、現今でも名誉毀損は特に重要視されイギリス国法のこれに対する 刑罰は決斗にも劣らず 厳しいものがある。

騎士の婦人に対する格別な尊敬については周知のことであるが、現代でもイギリスとアメリカの二大アングロ・サクソン 国位婦人をいたわる国が外にないことも周知の事実である。この事は英文学の理解上特に重要なので稍々脱線を憚らず、考えて見たいが knight も gentleman も一貫した封建的伝統に立脚したもので殊に knight の場合はその色合が濃く、初めから強者の弱者に対する思い遣りとして解釈すべきではないようである。この間の説明に於いてデベリウスは、woman と lady とを判然と区別して、最初騎士等が尊敬を惜まなかつた婦人とは、君主の、若くは君主としての夫人であつたと述べているが、注意すべき事である。即ち現代の gentleman の婦人尊敬は騎士のそれが階級観念を超越して一般化された姿である。この際にもデベリウスは彼の一貫の前提たる下ザクセンの農夫を引合にして、gentleman の婦人尊敬は王朝的伝統で、農夫固有の Tender consideration for woman (女性に対する優しい思いやり) からではないと言い切っている。

Woman in general is not better placed in England than elsewhere, only the lady.

(イギリスでは一般の女性が他国に比してよい立場にあるわけではなく、只貴夫人のみがそうなのである。)

中世紀の初期に既に、男系の子孫の、死に絶えた後には、騎士の妻は夫の所領とその封建的称号とを継承する権利を持つていたので、こういう婦人が尊敬を受けたのは当然で、やがてこの風がブルジョア階級に拡がった事も容易に背かれる。実際イギリスの諸都市間には、既に16世紀にブルジョア夫人達によつて、当時未だ大陸にはなかつた婦人の社会的自由が握られていた。17世紀には、一部には過ぎなかつたけれども、或る程度的女子高等教育も始められ Steel や Addison の如き随筆家達も婦人の読者を対象として執筆を始めた。そして一般婦人の初等教育すら未だ満足になかつた1848年には、F. D. Maurice がロンドンの Queen's College の中に大学に準ずる女子の為の教育施設を最初に置いた。

Women's rights in England derive, not from the respect for the sex as such, but from the knight's devotion to his lady, whence they passed, at first very slowly, to other classes.

(イギリスの婦人の権利は、女性を女性として尊敬することからではなく、騎士のその夫人に対する献身から由来したもので、かくてこれ等の権利は初めは 徐々にではあつたが、やがて他の階層へも移行したのである。)

とデベリウスも結んでいるように、これは背け相な論理である。但し

The automatic way in which popular feeling reacts to the slogan 'Woman and children' and springs to their defence when they are, or are supposed to be, in any danger, proves the degree to which the old knightly spirit is entrenched in the popular mind.

(‘女子供’と言う標語に一般の感情が自ら反撥したり、又彼女等か何かの危険を受けているとか或いは受けているらしいと思われる時に、彼女等の擁護に奮然と立上るその態

度は昔ながらの騎士らしい気概が、ある程度大衆の心に固く守られている事を示すものである。)

と述べるに至つてはドイツの学者らしい過度の演繹と言わねばならない。

ジェントルマンの姿を浮彫りにしようとする意図から、婦人についての見方が少し長くなつたが、次に服装と態度の優雅さについて一言せねばならぬ。抑も美服を纏つて、立派な物腰と、素晴らしい住居と、そして何事によらず気前のよさを示す事とは、騎士たるものゝ伝統で「中世紀のこの慣習はイングランドでは第二の天性になつている」と、デベリウスは服装などから騎士とジェントルマンの相似関係を示しているが、当否はさて置いて各時代の銘々の社会的地位を基礎にして論ずべきではなかつたか、この項についての彼の裏づけは頗る簡単に次の如くである。

The Scot who has to struggle with an unproductive soil, and who keeps out of the knightly tradition in other ways also, does not possess it, but it is evident as early as 1400 in the burghers of Southern England, when they appear in Chaucer's works.

(不毛の土地を相手に生活と戦わねばならなかつたと同時に、イングランドと違つた方法でも騎士の伝統を受けついでいない、スコットランド人は、それ一中世紀の騎士の慣習一を身につけていない。所が南イングランドでは、チャーサーの作中に現われている市民間には早くも1400年代にそれが明らかになつている。)

東洋風に言えば騎士もジェントルマンも結局は衣食足り、倉廩満ちて、それぞれに榮辱や礼節を知つた為に、体面や体裁を飾るのだと片付けられる所であるが、デベリウスはジェントルマンについて

With the mercantile spirit of Puritanism, there came a tendency to honour a matter-of-fact thriftiness. But so soon as an Englishman seeks, to be more than the mere merchant, so soon as he strives after social recognition, he displays a luxurious standard of dress, diet, travelling and personal service without parallel in the world.

(形式を捨てゝ実をとる清教主義の盛り上りと共に、ひたぶるな儉約を尊ぶ一種の風潮が起つた。が併し素町人たるに甘んぜず、社会的に認められんことを只管努むるに及び、世界中に比いのない程に、衣食や旅行及び家僕に贅沢さを發揮する。)

と言つて nobleman の列に近づこうとするイギリス商人の特性を表わしているが、こうした張りのある商人こそは大部分のジェントルマンなのである。

最後にデベリウスは騎士と相通ずるジェントルマンの、も一つの理想は、一般の慣習や社会の秩序に関する道徳と組織を、侵すまいとする強い力である事を挙げている。例えば全てのジェントルマンは教会、国家、社会を認めて、心中如何にそれ等に疑惑を抱こうとも、それ等の習慣に従い、それ等への反対は無作法であり騎士道精神にもとる罪でもあると考える。以上デベリウスは騎士とジェントルマンの因縁について考究を続けた後 gentleman の Humanism や Puritanism についての関係を詳論しているが、茲にはそれ等の要点のみを引抜いて、ジェントルマンの体面として考えて見たい。思うにジェントルマンの体面は三つの方面から眺められそうである。

その一は外形的な体面で、衣食住、坐作進退、言語などに関する体面と体裁で、この事は前段中既に述べた通りである。その二は知的体面とでも言うべきものである。歐洲を席卷した Humanism の影響はその国によつて形態を異にした。即ち階級別と職業別との関係交渉の、余りにも画然と分

れていて、非常に知性の勝れているドイツでは

It—Humanism—created something entirely new, the idea of the educated man (Gebildeter), a new, intellectual knighthood, recognized by everybody as supreme.

(人道主義は全く新規なもの、即ち何人にも最高と認められた今迄にない知性的な騎士氣質を創り出した。)

そして、It was revolutionary—its first fruit was Reformation, bringing in its train the Thirty Years' War.

(それは革命的であつた、それが最初に生み出した重大な結果は宗教改革であつて、その後にはやがて例の三十年戦争が起つたのである。)

のに、The more developed nationalism of England simply assimilated it.

(ドイツ以上に国家理念の発達したイギリスは人道主義を同化したに過ぎない。)

それで

The gentleman ideal lacks any sort of contact with mental power.

(ジェントルマンの理想観念には何一つとして知力との関係がない。)

とデベリウスが述べている程、ドイツでは尖鋭的と言つても良い位各方面で特に文学、宗教、哲学などに強い刺戟を与え Goethe、や Nietzsche 等を生み出したのに、イギリスでは、概ね所謂ジェントルマンの常識を高めるに留まり、換言すれば広義の生活に関する、一つの知識であり、又一つの技巧としての役目を果すだけのものとなつた観があり、考えようによつてはジェントルマンの体面保持に重要な意義があつたのではないかと思われるのである。

In so far as Humanism means general classical education and the rounding off of the human personality, no people has been so strongly interpenetrated by it, in its ruling classes, as the British.

(人道主義が一般的古典教育と、人格の円熟とを意味する限りでは、支配者層ではイギリス位それに徹底している国は何処にもない。)

と言うようなわけで、凡ゆる知識を身につけ、ストイック学派の厳しさとエピクロス学派の軟かさとの粹を現代風に、よく折衷して、坐作進退の立派な愉快なジェントルマンは、イギリスには実に多い。割合に古典研究の下火になつた今日ですら至る処の牧師館、大学の食後の休憩室、それに作家達のクラブ等には実に多くの彼等が見出される。そしてドイツと違つて、個々の知識や学問に秀でた学者こそは乏しいが、イギリスでは、政治家であれ宗教家であれ教育家であれ科学学者であれ、乃至は実業家であれ、専門外にも何か秀でた才芸と円満な常識とを身につけた、所謂ジェントルマンらしい面目躍如たる実例は枚挙に暇がないのである。

その三は徳義的体面とでも言うべきものである。由来何時の時代でも宗教の道徳に対する影響は大きく Puritanism の knightly ideal に対する場合も決して例外ではない。特にブルジョアの抱く騎士道的理想の場合は注目すべき結果を生み出している。デベリウスはこう言っている。

Under Puritan influences the knightly canons of honours and truthfulness were carried over into the domain of commerce and industry, where they created the notion of 'fairness' and set the world a brilliant example.

(清教徒の影響を受けて、騎士道的な名誉や誠実の観念の基準は、商産業界にも導入され、其処でそれ等は所謂「公正」という概念を創り出して世間に輝かしい模範をたれた。)

実際イギリス人の fairness 又は fair play は定評のある特色で今では世界の各層を風靡してい



る意義深い特性であるが、上にデベリウスが述べているように当時の中産階級が、形や名よりも実質を重んずる厳格な清教徒風な雰囲気にも動かされただけで、彼等商業人の根本理念までも変更したのではないだけに、この公正こそは格別の特徴というべきである。即ち彼等中産階級人、こゝで言う gentleman の道念は何時の場合でも決して偏屈なものではなく、常に融通性を持っている事が、本来常識と商才とに富んだ彼等を、理解する上に、忽せに出来ないことである。これに関してデベリウスは興味ある言い方をしている。

No gentleman can tell a lie, but 'fib' is a harmless way out of many a difficulty, which plays a disastrous part not only in the contingencies of daily life, but even more harmfully in politics.

(苟くも ジェントルマンは嘘は言えない。だが併し罪のない嘘は、只に日常生活上の偶発的な災難や一層有害な政略の上で、悲惨な役割を演ずる事のある 数多の困難を切り抜ける為の無害な方法である。)

こんなわけでイギリスでは政治上、宗教上の論争の注目すべき特徴は自己の立場を、全然虚構ではないが a notable economy of truth (真実に著しい手加減)を加えた主張で支持する傾向のあることである。ともあれイギリス国民の公正は彼等の体面への関心事である。

## 結 論

デベリウスのイギリス国民性論はその各特性の所謂櫛の齒式羅列の形式をとり、取り立てゝ序論とか結論とかの項を設ける事なく、只論文の冒頭に例の具体的人物、下ザクセンの農夫を掲げて民族的な代表者と見做し、その包蔵する幾つかの特殊性を彼の各個性論毎の起点としている事は数度に互つて既述の通りであるが、これはドイツの学者に共通の演繹法に従つたものとは言え、科学や論理哲学ならいざ知らず、複雑な原因と共に変転推移して留まる所を知らない民族性や国民性の研究には不適當な方法ではなかつたらうか。その上これは曾て述べた事もある通り、彼の国民性論には自然即ち地理風土に触れた個所は殆んど見出せない事である。学者によつては、例えば Arthur Bryant の如きはイギリス人の性格を決定するものとして、三つの条件、即ち民族、地理、風土を挙げているが、デベリウスは自然即ち地理、風土を殆んど度外視したと言つてもよい位に、考慮しなかつた事は、彼の論文をして何となく偏頗の感を抱かしむる最大の原因ではなからうか。

もともとイギリス人は民族的には Anglo-Saxon を主体として、他の諸民族の血と思想とを長期に互つて同化して来たのであつて、自然即ち地理と風土から生ずる寒冷で霧がちな空気が、却つて身心の活動を促し明暗定かならぬ変化に応ずる生活から、臨気応変の現実的態度 (Opportunism) や適応性 (Adaptability) 妥協性 (Compromise) が生れるのだと説く Bryant に比べれば、デベリウスの観方は余程趣を異にしている。

更にイギリスの文化は本来土に根ざした田園文化だと見るのが世の通念で、その土に生きる、全ての農夫の独立心や自由心が、国民性に重要な関係があるものと想像する事は不自然であらうか。凡てを下ザクセン農夫の遺伝的性格—それもデベリウスの独断とも疑われる性格—の演繹に落ち着けようとするのは多少論理のための論理の感がないでもない。我々は文学研究者的な立場から多分にその方面の引例を期待し、取り分け土の匂、風の香り、鳥の嘯りにも望をかけていたのだが根本に田園を考慮していないらしい彼からは無理であつた。田園文学の基調をなすものは

詩であり、彼の場合のように殆んど詩を除外したかに見える文学内容に基く国民性論は、たとえ夫が哲学的な思潮論としても偏頗の感を与えずには措かない。

併し思潮的に見るならばデベリウスの論理はまことに整然としていて、その上時宜に適つた実例の精緻さは、読者をして確かに首肯させるに足る迫力のあるものである。

先に我々は本論に於いて彼の各論の要点を掲げたので、これ等の論評は避けて、只一言一多少、論理に飛躍のきらいはあるにしても一次の事を述べて見度い。それは、彼の国民性論は結局は個人主義論と保守主義論と、それにジェントルマン論の三つに要約出来るのではないかと言う事である。

デベリウスが本論中で述べた対角線の観察を借りるならば、個人主義を経とし保守主義を緯とした場合、その対角線上に現われるのがジェントルマンだとの結論となり、興味ある形が得られる。既述の通り個人主義には頑なな利己主義から、哲学的根底に立つ自我まで、色々と幅のある解釈が成り立つようだが、その際その自我の発展が自由の希求となることも述べて置いた。又伝統を基本とする保守主義は、明らかに法則の遵守がその本体である。そこで個人主義と保守主義との関係は、考えようによつては、自由と法則との関係に置き換えられるのではなからうか。斎藤勇博士はイギリス文学を、又イギリス国民性を自由と法則との関係から論じ特にジェントルマンの性格を詳論しているが、デベリウスの議論も所詮は博士の議論に近づけられるのではなからうか、デベリウスのジェントルマン論はこの尺度で測られる時に、ジェントルマンの正体は、対角線上に歴然と浮び上るのである。最後にイギリス国民性とイギリス文学との関係を述べねばならぬのだが、上述の自由と法則とから立論した斎藤博士の文学思潮論の一節を借用して結論とし度い。「要するに古代英文学は尚自覚が鮮明でなかつたけれども、自由と法則の二要素を具え中代英文学は、大体フランス文化の法則を守つたものであるが、Chaucerの模倣的採用に始まりShakespeareに於いて絶頂に達したRenaissance文学は、自由を尊びPuritansの時代には自由と法則とが混入し、Pseudo-Classicismは法則に囚えられ、Romanticismは自由をあこがれ求め、Victorianismは再び因襲的な法則に傾き、その反動として世紀末には極端な自由を主張する一派が起り、Naturalismは自然法を以て人生を説明しNeo-Romanticismは、こらえ切れない内なる自由の歎声を洩らし、Neo-Idealismは法則と自由との融合を求めているのである。」

かくて国民性と英文学の関係は無限に続くものであるだけに、国民性の研究は、益々意義深いものとなるのであるが、デベリウスのイギリス国民性論はその後の世界的大変動を隔て、些か古く、どの程度まで現代にも適合するかは疑わしいが、大部分は依然変化のないものと信ずる。何故ならば国民性の流れは黒潮であつて、海面にざわめく小波ではないからである。